

肥前地区玄武岩地帯における草地適地

早 川 康 夫

(九州農業試験場)

永続的に草原景観を維持できる立地条件を草地適地として飼料作物を含めた一般耕地と区別すれば、最大の規制要因は有効水量の少ないことを挙げるべきであろう。ステップ、プレーリー、サバンナなどは何れも寡雨地帯にあるが、九州のような多雨地域に安定草原が成立するには特別な条件の箇所に限られる。たとえば柱状節理が発達する玄武岩地帯では滲透水量が大きく、頂上部分は有効水量が予想外に低減し安定草原が成立しやすい。長崎・佐賀両県には玄武岩が分布し、玄武岩台上もしくは玄武岩より成る島では安定草原が存続しているが、律令時代に肥後国に置かれた6箇所の牧(今の国営牧場に相当)は何れもこうした土地が選ばれている。

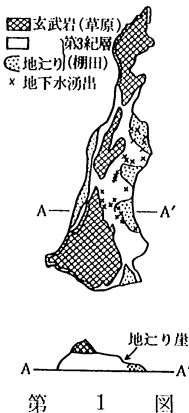
生月島は基盤の古第3紀層質岩もしくは泥岩上に見事な柱状節理を持つ玄武岩を載せた島であり、玄武岩台上は雨水の地下流亡と玄海灘の強風にさらされるという条件が重なって、有効水量に乏しく樹木の生育を許さず、古くからシバ草原として和牛の放牧に供されてきた(山頭草原など)。地下に潜った雨水は玄武岩台麓より湧出し、多くの溜池が造られ、台下の3紀層斜面の棚田に灌漑されている。あたかも玄武岩台地が給水タンクの役目を果たしているように見える。しかし基盤の3紀層に挟存

する凝灰岩薄層への浸入水による粘土化により地じりが頻発し、地じりの島々として有名である。

北松浦郡の玄武岩台地はメーサ地形を呈するものあり、台上にはめくらが原など広い草原が存する。最近は放牧採草が廢れたが、樹木の侵入が少なく草地景観が維持されている。基盤は石炭層を挟む古第3紀層で、洪積代礫層(八ノ久保層・厚さ10m以下)を間に玄武岩を載せている。玄武岩の節理は見事なもので、地下透水能力著しく、有効水の低下が草原景観維持の大きな要因と考えられる。玄武岩層を抜けた水は八ノ久保層に保たれ、3紀層地じりの最大の誘因となる。棚田に灌水する溜池は地じり崖を利用したものが多く、その数の多きは異常であり、玄武岩の透水量が極めて大きいことを窺い知る。

その他松浦市竹の本場草原と今福地じりも上述と同じ因果関係にあり、佐賀県神集島も玄武岩からなる島で安定した草原を持っていたために生月島同様牧としての古い歴史を持つ、また御厨牛や宇久牛、小値師牛も玄武岩草原を控えて牛の飼育が盛んであったことを物語るものである。これらの草原が何故耕地化されなかったかについて、旱魃を受けやすく、地力も低いため麦、稗、粟の耕作にも耐えられなかったもので、徳川時代中期頃から甘藷の導入でようやく開墾が始まり、今はたばこが最も安定した作物とみなされているが、放棄荒廃草原が再び増加しつつある。わが国では乾燥低地力地を劣等とみなし農用不適地と評価しがちだが、草原、草地はこうした条件の土地でこそ永続維持に適するもので、その適性を認め過疎に対応する土地利用法として草地化の再検討を必要としている。

透水性が高く有効水が乏しい条件であれば草地適地は玄武岩だけに限らない。石灰岩やメーサ地形の台上も草原になり易く、一般にこうした条件の土地は耕地や林業地として不適であり、従って草地適地は耕地、林業適地と本質を異にするが、律令時代に既にこのことを認識し牧を用いた古人の英知に敬意を表したい。



第 1 図